

## 目加田さくを著『源氏物語論』

工藤, 重矩  
福岡教育大学講師

<https://doi.org/10.15017/12120>

---

出版情報 : 語文研究. 41, pp.42-43, 1976-03-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 紹介

# 目加田さくを著『源氏物語論』

工藤重矩

本書は全体を三編に分き、天部、地部、人部とする。専門書には珍しいが、是は著者の用意であつて、世界を構成する天地人を以てするのは、本書がまさに源氏物語の世界を運行せしめる原理を明らかにしようとするものである事を端的に表すものであろう。「紫式部は、どうも、意識して、源氏物語世界を或る世界観の原理で以て、厳しく律しているように思われる」という観点から、天部として因果律、対偶律、地部として血統律環境律、偶然律、人部として美の受容という、五つの原理と一つの様相に分つて、これを明らかにしようとするのである。以下章を追つて簡単な内容を紹介しよう。

第一章因果律 まず紫式部日記等の源氏物語周辺の資料で當時の人々の世界観が極て仏教的なそれ、即ち因果律に支配されている事を確認し、男の政治の世界をめぐる物は、政権への執念のあげくの「怨念」であるが、女の場合は愛執が怨念となつて運命を支配する、愛執の因果律を、源氏物語の中で、罪、報、契、宿世の四項に分けて、桐壺帝と更衣に始る愛執の業因が次々と人々を巻き込んでめぐる様を、豊富な原文の引用を行

いつつ解き明している。第二章対偶律 父為時の教えを受け、漢詩文に通暁していた紫式部にとつて、漢詩文に特徴的な「対偶」という形式は、単に修辭に止らず世界観にまで影響していたらしい。そこで源氏物語の対偶表現を、語彙上の対偶、文章上の対偶、また和歌については修辭の他に先行文芸との対偶という観点から引歌引詩を考え、贈答歌も対偶形式として扱い、更には、薰と匂宮という如くに、容姿・性格を始め種々な面に亘つて対となる人々をとりあげ、またかげ物にも主贈物と添え物という対偶を認め、物語の構成に於ても姦通(藤壺・女三宮)、皇女降嫁(女三宮・女二宮)等に対偶構成がとられていると説く。これら源氏物語の対偶を(1)正対(2)同対(3)正副対(4)争対(5)異対に分類している。第三章血統律 人間形成において遺伝と環境を言うのは現代でもそうだが、紫式部もまた人物造形にあたつて血統を第一に重視している。源氏物語では皇系、藤原左大臣系右大臣系の人々にそれぞれ特有の容姿・性格が付与されている。「なまめかし」は皇系に多用し、光るという形容は光君とその子に限られる、等々。性格では皇系は好色で人の思惑を気にす

る所があり、子には愛情深いが時に偏愛を示すのに対し、左大臣系は気高くすくよかで礼儀正しく誠実であるという風に、各人物がそれぞれ母系父系の性格によって形成されている有様を用例を列挙して説明している。第四章環境律 物的・心的多様な環境のうち、特に風土的環境としての「鄙」の扱いを中心に紫式部の意識を明らかにしようとする。東国育ちの浮舟が愛情面にルーズであるのに対し、筑紫育ちの玉鬘は、すくよかでおおらかで、しかも源氏を巧みにそらす智性をもった、大柄な野性的美人として創造しており、小柄を良しとする当時、大柄な美人を造形したのは式部の功績とされる。また近江は都に近く文化はさほど低くないのに、近江の君の如き女性を造形したのは、紫式部は新婚当時、近江守の女に夫が通うことがあったので、その怨みを「近江の君」にこめたのだという興味ある説を示している。他に、教育もまた人間形成に与る要件であると式部は考えていたことを説いている。なお、源氏物語における女性の容姿美造形と都鄙として、源氏物語の女性の容姿に関する文章を人物ごとに列挙している。第五章偶然律 源氏物語には偶然の出あいが何度か用いられているが、その場合にも周到に条件を考えていて、矢鱈と偶然の出あいを設定することに式部はためらいを感じているようであるという。第六章美の受容―好色―好、即ち「すき」における美の受容のあり方について、特に「風流」に関して、自然美、芸術美の追求が好色(すき)の要素であることを述べ、美の追求に関連して、光源氏にとって「幸福」とはどのような状態をいうのか、巻を追って確めている。また好色の「色」即ち美色(美)に関して、最

高美としての「なまめかし」「艶」の用例を求め、使われた人物と関連させて、二つの言葉の現わす意味様式を考察している。以上甚だ表面的ながら一通り内容を紹介した。本書の特徴は雑誌論文を基としているにもかかわらず極めて構成整然としている事で、源氏物語世界を運行させる五つの原理がそれぞれ連繋を保ちつつ転回している様が一望に見渡せるのである。またしばしば言及した事だが、論拠となった用例を豊富に示しており読者は一々確認しながら進める訳で、安心して説を納得することが出来る。豊富な資料は著者の論旨から離れても使用でき益する所大である。また一つの特徴は、著者の視野が極めて広いことである。東西の文献、古今の状態、これらがみな一つの目標に向って収斂されてゆくのである。著者は以降次々と論著を刊行されると「後記」にある。今から待遠しい思いである、それはともかくただただ本書の真価を伝え得ていない事を恐れる。

(昭和五十年五月笠間書院刊六五四頁一〇、〇〇〇円)